

るとかで途中で帰ってしまった。だから同教科のIさんと私で都合のよいように決め、K君がトップバッターということになった。彼の不運はここに始まっていたかもしれない。

K君は授業前の空き時間に私たち実習生一同を生徒に見たててリハーサルをした。しかし、これも無駄だったようだ。

いよいよ実習開始となった。ぎこちなかった。彼はトップバッターという重圧に対する緊張と不安で押しつぶされてしまった。生徒に受けなかった。彼が一生懸命に考えてきたギャグも効を奏さなかった。彼は落ち込んだ。そして暗くなった。練りに練ったギャグはうけないことがわかる。よせばいいのにこれに拍車をかけたのが数学のT君だ。彼からのたつてのたのみで、彼の評価を生徒から聞き、彼K君に伝えたそうだ。「下の下」これが答えだ。K君がさらに暗さを増したのは自明の理だ。

第二章 T大学のK君

ここで登場するK君とは主人公のK君とはちがう。福山附属の卒業生で東京の某有名大学のK君（通称カマ兄さん）である。K君はひたすらカマ兄さんと仲良くなった。落ち込んでいる彼には、カマ兄さんは強く優れている者として映り、同一視することで（実際話し方が似てきた）その状態からぬけ出そうとしていたのかもしれない。カマ兄さんの授業はというと、とてもわれわれ実習生一同の間では参考になったというもっぱらの評判だった。K君はカマ兄さんととても親しくなった。

第三章 私の授業(I)

私の受け持ちの授業はK君が失敗したクラスだった。しかもそのクラスしかやらない。もっと悪いことにそのクラスは女の子が権力を所持しており、男の子たちには活気がなくて、典型的な女性上位のクラスで、非常にやりにくいクラスということだと、数学のT君が言っていた。反面T君はそのクラスでうまくやったそうだが、こういうクラスの攻略法は1つしかない。女の子を制するものはこのクラスを制する。私の幸運は、まず実習開始の順番が実習生10名（総科は3名）のうち9番目であって反省すべき点や改めるべき点が数多くわかっていたことであり、最初の授業が、生徒たちも割と熱心にする実験であったということだ。生徒たちが熱心にするということは授業の雰囲気もよいし、それにその結果として教師への評価や印象もよくなる。（ただしそれだけではないのだが）たしかに生徒にはうけていた。

女の子の方にだが。実験でもあるので、絶えず机の間をまわって授業を進めた。しかし後から考えるとどうも女の子の方しか行かなかったような気がする。とりあえず成功した。放課後の反省会で先生から雰囲気づくりには成功しているが、授業計画をもっとしっかりとするようにと言われた。返す言葉もなかった。授業時間をオーバーしたのは事実なのだから。

第四章 K君中学生日記

彼の2つ目の授業は中学1年生に種子植物のところを教えるものだった。彼は授業のまとめで性教育めいた方向へと行ってしまった。これはK君が前回の失敗をとりもどすために考えた起死回生になるはずの対策であったと私は推察する。だが反省会では先生からきびしくおこられた。中途半ばであるものなら、してはいけないということである。この領域に関してはタブーのようだ。彼の暗さはますます増してきた。実習生一同から暗い暗いと言われた。生物生産のTさんなどは「どうやってなぐさめたらいいのか、言葉のかけようがない」と言っていた。彼はどこまで暗くなるのだろうか。

第五章 事件

知っている人は知っている。今後こういうことを二度としてはいけないという事件だった。

第六章 私の授業(II)

前回の授業で例のクラスの女の子が私のことをパンダみたいと言っていたことを数学のT君から聞く。私の授業はまたしても例のクラスだ。カマ兄さんは附属では顔がきく。カマ兄さんは私の授業前にそのクラスへ行き遊んできたようだ。そこでそのクラスの女の子に次の授業はだれがやるのか聞かれたそうだ。カマ兄さんは、実験のときのお兄さん（私のこと）だよと言ったそうだ。その女の子は、まあうれしいという返事をしたそうだ。カマ兄さんはひがんでいた。授業は前回の実験のときのようなペースで進行し、終わった。カマ兄さんをして、あんなに盛り上



<「教育実習にそと2トレーニング」>

がった授業は初めてだと言わしめた。カマ兄さんに勝った。T大学に勝った。放課後の反省会で先生に態度でうけてはいけなく、授業内容でうけてはいけないと言われた。態度でうけるということに関しては後日その日の授業を見に来た数学のHさんから、T君と同じで「うけよう、うけようとしている」と言われた。本人はいたってまじめにやっているのに。

第七章 K君最後の授業

さんざんだった。

第八章 おわりに

K君の失敗の最大の原因は雰囲気づくりに失敗したことにある。これは授業成立の大前提であるから、これを欠いてはうまくいかない。K君はそのことに気付かずしてほかのことで改善を試みようとした。もちろんそれは失敗に終わった。雰囲気づくりが彼に欠けていたことに気付いたのは私でさえ実習が終了してしばらくして、実習のときのことを思い起こしてみたときだった。だから実習中には彼に適切なアドバイスはしてやれなかった。現在K君はのりについている。教員採用試験は2次の結果まちだし、大学院にも合格した。彼の人格はかわった。ひどく明るくなった。筆者はただ今試練のさなかである。

教育実習に関して

僕が言っておきたい一、二の事項

数学科 情報行動科学コース 大西 日出和

道路地図を見ると、広島・福山間は106.5 Kと表記されている。僕のKLのトリップ・メータは112を示していた。目の前にあるのは校門、広島大学付属福山中学校高等学校と二つ名前が併記された銅製の門標が埋め込まれている。ここで僕たちは、これから2週間、教育実習という名のもとに過ごすのだ。ヘルメットを右のミラーにかけると、閉じている校門を開きにかかった。それは6月中旬の日曜日の事、六月祭で賑わう本部キャンパスを後にして、既に2時間が経過していた。

福山は城下町だ。福山城は国鉄福山駅のすぐ北側に建っている。福山駅を通る山陽本線と新幹線の軌道は東西に伸び、三次へ向かう福塩線だけが、福山駅を出るとほどなく、大きく北へ曲がってゆく。国道2号線は、山陽本線や新幹線と平行して、そのや

や南側で、市街地を貫いて走っている。道端の標識には岡山まで50数キロという文字があり、地理的には広島より岡山の方に近い事が見てとれる。

駅前通りは道幅広く、周辺には官公庁、銀行、企業の支店が集中し、一応ビジネス街を形式しているらしい。

市街の西部には芦田川が南東方向に流れており、瀬戸内海に中国山地の水流を注ぎ込んでいる。川ではないが福山港は、市街地のかなり奥まで突出した形になっている。市街の中央部に、松浜町、船町、港町等の町名が見受けられるのは、現在の市街地のほぼ南半分が、埋め立てや干拓で出来上がった事を示しているのだろうか。

それはともかく、付属中学高校は、市の中心部を少し離れ、福山駅から見ると北東の方角であろうか、郊外の閑静な住宅地の一角、なだらかな丘陵の中腹にあった。

学校が丘の中腹にあるという事は、当然、そこに到る全ての道は坂道である事を示唆している。さて、ここで問題になるのは、学校の正面を通り丘を縦断している2車線の舗装道路なのである。これは確かに舗装道路なのである。但し、同校の横から下り方向へ約200メートルの区間、その舗装面のいたる所に穴が穿たれ、小石、土、砂が舗装面を覆っているというだけの事なのである。

一つ、バイクに関して御存知ない方のために注記しておこう。バイクは四輪車と異なり車輪が2つしかない。従って、バイクは走行を中断すると転倒する運命にあるのである。この場合走行とは、駆動輪と地面との摩擦によって車体を前方に進める事である。つまり、駆動輪がいくら回転していても、摩擦が無ければ前進しない訳だから転倒してしまうのである。

さて、賢明なる読者諸氏は既におわりの事と思うが、この摩擦を無くする奴、こいつがバイクの天敵、転倒の元凶とゆー訳だ。で、それにはどんなものがあるかとゆーと、雨の日のペイント（例えば横断歩道）、雨の日のマンホールのふた（他には鉄板などの金属板）そして、晴雨に関せず路上の砂、なのである。

いよいよ本題である。結局、私が言いたかったのは、次のような事である。

「福山附属の前の道路では、バイクの転倒に注意しましょう。」

今年の場合、バイクに乗って福山へ教育実習に行

ったのはオレ一人だった。来年、バイクで行く奴が居るかどうかオレは知らない。また来年まで、あの道があのままの状態であるのかどうか私は知らない。しかし、もしもって事はあり得るのだから、やはり書いておこう。転ぶと痛いし、大体ケガするし、バイクは破損するし、女の子がタオルをくれる、とは限らんし……。

これで、^{注3}教育実習について僕の書いておきたい事は終り。実際の実習風景について何も書いてないだつて？それでもいいんじゃないだろうか。本当の所は、自分がその場に立たないと判らないだろうし、立てば必ず判るのだから。ヘタにあれこれ知っているより、不安と期待が混在したまま臨むというのが、やはり最良のように思える。

自己評価をすると、僕はてんで駄目な実習生だったけれど、2週間のバランス・シートは、結局プラスになっているから、誰だってプラスになるに違いない。

だから2週間、短いようで長い、だけど長いようで短い2週間、来年行く人も、さ来年行く人も、頑張る欲しい。でも、言われなくても、頑張るよな。

・注1：カワサキの250CCトレール・バイクである。OHCバルンサー無しの単気筒は、シングルの味を十分に楽しませてくれる。中低速のトルクは、なかなか強力で、高速も、シングルにしてはよく回る。とっても良いバイク。

・注2：バイクには普通、後進のギヤはない。

・注3：早い話が、僕はバイクで転倒したのである。保健室で応急手当をして、あと放っておいたら、腰の骨の所に水が貯まり、広島に帰ってきてから通院する破目になってしまった。福山へは、きちんと保険証を持って行きましょう。けがしたら、すぐ病院へ行きましょう。注射も嫌がらず受けましょう。お父さんお母さんを大切にしましょう。

小道具でキメッ！

—教育実習について—

英語科 地域文化コース 安居 宏

概説的なことに終始しても、また英語の教授のノウ・ハウについて述べてみても、それらの事は三浦先生の英語教育学概論を授講した者にすれば何のプラスにもならない。そこでこの紙面では極力英語科担当13人(広大総科が10人、付属卒業生3人…女性ばかりでユニークな人ばかりであった)を代表して(?)小生の少ない経験の中から気づいた点を2、3ピックアップしてみたい。

まず他の担当学生とは違った授業をすることである。とは言っても初めて教壇に立つ者ばかり、大し

た差がでるわけではない。ゆえに勝負は「小道具」にかかって来る。フラッシュ・カードを作るもいい。生徒指名用オリジナルカードを作るもいい。とにかく何か変わったものを作ることによって、生徒を引きつけるのである。音楽を取り入れることも良いであろう。小生とイギリス研究のひょうきん者吉本氏は、ビリー＝ジョエルの“Don't ask me why”を授業中に使ったが、小生の場合何の効果もあがらず、我が指導教官である柄本先生に慰めの言葉、「なかなか良かったよ」をいただいた。しかし何と言っても小道具大賞に輝くのは、たまたまイギリス研究のビッグな男赤池清隆氏である。彼は授業で、地球の内部構造を扱った課を担当した時、朝食(自分達で作らなければいけなかった)のゆで玉子を食べずにこっそりと隠し持ってゆき、授業中おもむろに右ポケットからティッシュに包まれたそれを取り出した。そして定規で玉子を半分に切り説明を始めたのである。一瞬生徒達はあけにとられ、赤池氏の方に注目した(もちろん冷めた生徒もいることはいたが)。その後、玉子を赤池氏が食べたか否かは、本人に直接お聞き願いたい。

数学科の竹内氏のように落語研究会で鍛えた話術があれば、こんな苦労はしなくて良いのであるが、そんなわけにもいかない。小道具こそ実習生の命と言っても過言ではないのである。またそれらを考え作ることによって授業そのものだけでなく、違った角度から授業中に生徒の反応を見られるという楽しみが増すのである。ぜひ一度、作られてはいかがでしょうか。但し、小生の場合、折り紙を出して、ある生徒に与えた時、その周囲の人間が騒ぎ出し集中力を欠かせてしまった。このようなことには十分注意を払って小道具を考え出して下さい。

さて、このような小道具を出した時の反応、また教え方そのものに対する生徒の反応についてであるが、これについてはこの紙面で何枚費やそうとも語り切



れない。だから実際福山で経験して下さい。但し、いつもの自分を出さなければ生徒の反応は悪くなります。緊張して声が出なくなり動きが鈍くなれば、完全に生徒から浮き上がるでしょう。でもクラスの中には必ず相手になってくれる生徒が4、5人いますから、ご安心を。またクラスの中には彼らとは違ったタイプの生徒、クラスの指導者的存在である生徒がいます。この生徒達を手中におさめれば授業が楽しくなります。(但しこっちが緊張していれば失敗します)

最後に福山での生活ですが、男子学生は2班に分かれ、一班は付属の寮で、もう一班である小生らは学校内にある記念館で寝泊まりしました。もちろん食事はなし、食べに出るか弁当を買って来てもらうかどちらかです。女子の方は旅館に泊まり、確かに

金はかかったそうですが快適な生活をしていました。友人の下宿に同居させてもらった学生もいますが、やはり皆と共に生活をした方が苦しみを理解し合える仲間であるがゆえにいいでしょう。

来年福山に行かれる皆さん、ぜひともあの2週間のうちに努力して下さい。貴重な学生時代の思い出になるはずですが、後悔ばかりが残るかもしれません、それでも有意義な生活が送れます。なお、服装には気をつけて下さい。特に男子諸君、白のカッターが無難です。色もののカッターは良くありません。小生は色もののカッターばかりを着用していたところ、ある生徒の間で“ヤクザ教師”などと呼ばれてしまいました。もちろん髪型はオールバックで通していましたが、では良き2週間を。

終了の辞に代えて

教生代表 53生社会文化 林 信 弘

あっという間の2週間でした。

教壇に立つ前は、皆さんとこんなことを勉強したい、こんなことを伝えたい、と大いなる志に燃えるのですが、イザ教壇に立つと、思うことの半分も出来ないあり様で、七転八倒の2週間でした。

結果、皆さんにとっては、混乱と空白の2週間であったのかもしれませんが。

でも、私たちは皆さんのシビアな視線にさらされ

るなかで、ほんとうにたくさんの貴重な体験を得ることができました。

そのことを、とっでも皆さんに感謝したいと思います。どうもありがとうございます。

そして、恐れを知らぬ私たちを手とり足とり指導して下さいました先生方、印刷や事務などでお世話になった職員の方々にも、この場をお借りして、お礼の言葉を述べさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

明日からまた、皆さんの手で最高の学校生活をこしらえていって下さい。祈っています。

外国人の先生方にきく

総合科学部で授業を担当されている外国人の先生方に、日本人学生の印象を寄せていただきました。授業を通してみた教育論や、学部論、個人的体験談等、内容は、まちまちですが、「外」からみた学生論の一つとしてお読み下さい。なお翻訳や原稿執筆のお願いに際しては、伊東先生、西田さん、淵上先生、福居先生、村瀬先生他の方々の御尽力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(編集委員会)

SOME THOUGHTS TEACHING ENGLISH at HIRODAI

Peter Anthony Goldsbury



I would like to thank the editor of "Hisho" for allowing me to express my views about Japan, Japanese students and the Japanese language. I have been living in Hiroshima for nearly two years now but I have learned only a little about Japanese culture. This is because it is extremely difficult for a foreigner to learn about Japan. The language is very difficult to learn and your culture does not give up its secrets easily. I will need many more years of hard study to gain deeper understanding.

Concerning the differences between students in the West and in Japan, the first thing that strikes me here is the relationship that exists between 'sempai' and 'kohai'. Although Western students in their first year of study do establish a class solidarity, especially in the USA, and do become friendly with the senior students, there is very little resemblance to the relationship that develops between a freshman and his seniors here in Japan. When I went up to university as a freshman in England in 1962, the people I first got to know were my tutors and those students living near me in my college. Let me explain. At some universities, a student has different teachers each semester. There are no classes as such. Instead the student writes an essay about the particular course he is taking, takes it to his teacher (called his 'tutor') and reads it aloud to him. The tutor gives his comments orally and usually forces the student to defend by argument what he has stated in the essay. There is no one else present, only the student and his tutor, and this 'tutorial' class takes place every week. If the student is studying an 'Arts'-type subject, such as English, History, or Philosophy, all his classes have this tutorial form. Lectures are optional and the student spends most of his time reading in preparation for his essays and writing them. A tutor can be very severe, especially if the student has not made enough preparation and has written a bad essay. If a student's work is persistently bad, or if he is often absent from his tutorials, he is expelled from the university. Thus, a strong relationship develops between a student and his tutor. In his college, the student will meet other students of the same year, but doing different subjects. Through friendships with these others, the student broadens his own outlook. The aim of his experiences at university is on developing a critical attitude as an individual: a constructively critical attitude. There is not the same sense of belonging to a group, such as a class or club, as in Japan. In Hiroshima University, most of my classes have about 40 members, and there is a strong sense of belonging. This sense of belonging is fostered by the encouragement of the senior students who were in the classes in previous years, and is further strengthened by group activities such as camps. In England, camps are unknown; since there are no classes as such, there is no need to foster such solidarity. Even most clubs in English universities meet only once a week.

I might add that I think it is my job here in Hiroshima University, to give my Japanese students a glimpse of Western educational methods. Since I am a Westerner, I teach in a Western way. I am not capable of teaching in a Japanese way. For some of my students, this might be a rather painful experience. For in England, a student is expected to participate actively in his class or tutorial, and not just sit and listen to the teacher.

I do not think that English is any more difficult for Japanese to learn than any other language. The years of Japanese isolation in the Tokugawa period affected every foreign culture alike, and a language cannot be divorced from its cultural milieu. If you make such a divorce, and rely only on grammatical training and ability to translate from and to Japanese, you will produce persons who know much about the language but who cannot converse intelligently with native speakers. It is like being an authority on music and being unable to play a musical instrument

Each April, I see the looks of shock and horror on the faces of some of my new freshman students as they realise that they have a gaijin teacher, who will not speak Japanese, and that their six years of High School English has not prepared them to cope with such an experience. He expects them actually to speak to him, and with no preparation!!!! Of course, I understand the problem and have much sympathy with such students. I have precisely the same problem with Japanese!